

令和二年度夏季埼玉県高等学校野球大会優勝の快挙を、生徒・保護者・卒業生・後援会すべての皆様と共に喜ぶ

狭山ヶ丘高等学校・同附属中学校

校長 小川義男

新型コロナウイルスの感染拡大のため中止となった、全国高校野球選手権埼玉大会の代替として開催された夏季埼玉県高校野球大会の決勝戦は、八月二十三日、メットライフドーム(西武ドーム)において行われた。NHK やテレビ埼玉でも放映されたので、その結果は既に殆どの皆様が、ご承知のことと思う。学問とともに運動、文化活動を大切にする我が狭山ヶ丘学園においても、全県制覇は極めて珍しいことである。野球では、県ベスト4まで進出したことはあるが、全県制覇は初めてである。

決勝戦は、附属中学校の「小学生対象オープンスクール」の当日であり、私も観戦を諦めていた。ご説明の都合上申し上げておかねばならないが、当日のメットライフドームには、三年生の野球部保護者しか入場が許されていなかった。感染症予防のため、入場が厳しく管理され、観戦許可のない保護者の入場は禁止されていた。私の観戦も本来不可能であり、オープンスクールに参加後、球場に駆けつけることも許されぬという状況であった。しかし、二年生の保護者のある方がドーム当局と交渉して下さり、私には「遅れての参加」が特別に許可されたのである。私を案内するため外部で待機して下さっていた保護者の方も、案内して下さった後は入場できず、猛暑の中、外で待機しておられたのである。私の入場許可がどれほどに「特別」であったかを推察いただけるかと思う。

聞けば、準決勝・決勝のメットライフドームの使用は、ドーム当局の格別のご厚意により、無料だったそうである。衛生管理その他の必要もあるなかで、ドーム当局の大変なご厚意であったと思う。

決勝戦の対戦相手は、強豪を以て鳴る、「昌平高等学校」であった。私は内心で、相手が相手だから、この戦いに勝つことは難しいのではないかと不安に怯えていた。三回の裏に私は入場したのだが、既に我が学園の荒武者どもは、三対一の優勢な状況を獲得していた。

県大会の決勝戦であるだけに、応援する我々の緊張も著しく、「これは心臓に悪いな」と、苦笑しつつの観戦であった。埼玉県議会議長の田村琢実氏をはじめ、多数の県議会議員の先生たちも来て下さった。私は、県大会決勝戦の重さを改めて痛感した。緊張の連続、脂汗がにじむような瞬間の連続の後、勝利した瞬間の嬉しさは、とても言葉に表現できるものではない。勝利の瞬間、選手たち、平澤監督、佐口部長の喜びはどれほどであったろうか。

試合の経過については、あらゆる新聞が詳細に伝えたし、NHK その他のテレビを、殆どの方々がご覧になっていると思うが、ベンチの内外での選手の動き、監督の采配は、佐口を通じて聞いている。佐口は言うのだが、彼もバスケットの監督経験者なので、平澤の采配、

選手の動きには大きな関心を持っていたようである。佐口は、バスケの試合の折などに、失敗した選手をあまり叱らないそうである。選手が怯え、萎縮して、伸びやかに活動できなくなるケースが多いからである。しかし、平澤は相当厳しく叱るそうである。選手も、普段の指導のなかで厳しさに耐えられるよう、強く育てているらしい。歴史を振り返れば、伊東、熊谷監督等、県内強豪として知られた時代の、狭山ヶ丘の伝統、血脈が、現在の狭山ヶ丘を形づくってのもいるのであろう。平澤の凄いところは、厳しく叱るのだが、その選手を交代せず、必ず継続して起用し闘わせるのだそうである。戦いは、強豪揃いの埼玉県での決勝戦である。叱られても、なお闘える機会を得た感動はいかほどのものであろうか。彼らは、奮起して闘う。命がけで闘う。

入学試験にも、似たようなところがあるが、生徒は、「戦い」のなかで強くなり、実力を蓄積していくのである。甲子園で、はじめは弱かった沖縄県の代表校が回数を重ねるごとに強くなっていく様子を、テレビ観戦を通じて実感したことがある。「そうか、人間は戦いのなかで強くなっていくのか」、佐口の話聞きながら、私は、その日の戦いの有様を思い返した。「厳しく叱るが、生かして闘わせる」、それが平澤流なのである。

「人間同士の信頼は、べたべたした甘さの中から生まれるのではなく、目的を共有する同志たちの、厳しさをともなう愛のなかから生まれるのか」、佐口の報告を聞きながら、私は、ここに、日本教育の致命的な弱さを克服せんとする、逞しき若者の姿を見たように思った。また、その愛と信頼と厳しさの周辺に結集する若者たちに、明日の日本の大きな可能性を発見できたようにも思った。

全县を制覇した狭山ヶ丘の明日には、強敵が雲のように集まって来よう。昨日までの日々も安易ではなかったが、これからは一層の厳しさが我々を待っている。頼もしいエースピッチャー清水も来年はいない。輝かしい三年生全員が学舎を去って行く。これからは一年、二年生と、新しく入学してくる来年の一年生だけで闘わねばならぬ。

しかし、我が野球部には、一身上の都合で家業に専念する必要が生じた山田前監督並びに、彼を監督に起用した新居元教頭の理念は生きているし、言葉は少ないが平澤の奥深い指導力もある。保護者は、いかなる困難の中でも、毅然として我が野球部を守り続けて下さった。この後も我が野球部を支援し続けて下さるであろう。何よりも平澤が静かに、決戦に待機している。

強敵が、我が狭山ヶ丘に蝟集^{いしゅう}してくることであろう。だが、狭山ヶ丘はたじろがない。県大会を制覇した我が狭山ヶ丘は、平澤並びに若者たちの底力で、何としてもこの先の戦いも勝ち抜くであろう。

優勝旗は、返還するのではなく、記念大会で本校に頂いたものだそうである。優勝旗のある学校だ。この先も勝ち抜き続けようではないか。

終わりにメットライフドーム当局の、甚大なご厚意に深く感謝する。

狭山ヶ丘は、学問、文化、進学、その他すべての分野で、大埼玉の前衛部隊として戦い続けるであろう。